

## 教育学部と附属養護学校の連携について

－附属養護学校のスポーツクラブ・各種行事等への学生の参加意識について－

松永 郁男・畠澤 郎<sup>※</sup>・宮内 英光<sup>※</sup>・丸山 敦夫・岡田 猛  
武隈 晃・前田 雅人・廣瀬 勝弘・上温湯 晋<sup>※</sup>  
(※鹿児島大学教育学部附属特別支援学校)

(2007年10月23日 受理)

Consciousness of Students Participating in School Events in Cooperation with the  
Mentally Handicapped Children's School Attached to the Faculty of Education.

MATSUNAGA Ikuo・HATASAWA Tsukasa・MIYAUCHI Hidemitsu・MARUYAMA Atsuo,  
OKADA Takeshi・TAKEKUMA Akira・MAEDA Masato・HIROSE Katsuhiko・UWANUYU Susumu

### 要 約

目的：現在行っている附属学校との連携事業が教員養成にどのような影響があるか、附属養護学校のイベントに参加している人達の実態を調査した。

方法：イベント支援が終った時に、その体験についてアンケートによる調査を行った。

結果：参加回数、種目の違い、参加回数が支援者の意識に違いを及ぼすことは見られなかったが、障害のある子どもの指導をできるようになるには顧問教師等の手助けの必要である事が考えられた。

キーワード：附属養護学校、附属連携、教員養成、実践力

### I 研究の目的

教員養成において学生の実践力の向上が叫ばれてから久しい年月が推移した。平成10年頃から、新採の教員の実践的指導力不足から、実践力を養成するために文部科学省は附属との連携の計画を強く勧めた。

現在も各大学共に学生の体験実習時間を多くして教育現場に於ける実践力<sup>1)</sup>を養うに努力している。

文部科学省は理論と実践力の融合した教員の養成に向けて、教職大学院の設置方向を目指すように全国にアナウンスしている。教職大学院の設置も平成20年4月には大学院生の募集を行って、開設されようとしている。<sup>2)</sup>

島根大学では2004年から小、中、高の教員になるために体験実習を現行の200時間程度から

1000時間に増やすことを決めた<sup>4)</sup>。平成15年3月2日の西日本新聞を観ると「文部科学省教育大学室のよると体験実習を1000時間も必須とするのは全国でも例がないという。同大によると1000時間の内訳は一般的な教育実習が400時間、心理・カウンセリング体験が200時間、学童保育や環境学習などの現場体験で400時間となっている。同大教育学部の高岡信也教授は200時間程度の教育実習は世界的にみて日本くらいだ。子どもに出会う機会を増やすなど現場体験を豊富にし、優れた教員を養成したいと話している。」と載っている。このように体験実習時間の大幅な増加を打ち出して注目を浴びた大学もあるほどである。

その影響で学部と附属連携を図り、附属は場を設定し、学部は学生を送って学生の実践力の向上のために努めてきた。

更に本学部では鹿児島市内の小中学校とも連携を図り、学生の実践の場に於ける指導力の向上に努めようとしている。

その一例であるが、産経新聞では<sup>9)</sup> 2007年の1月27日の朝刊に教員養成GPで採択された仏教大学教育学部「現場で学べ、実践力を備えた小学校教員養成」を目指し、「小大連携プロジェクト」の展開を紹介している。その内容は三つのプログラムからなり、プログラム1は大学の教員とゼミ学生が連携の小学校に出向き、授業を実践し問題意識をもつ、プロジェクト2は現職教員プログラムで現職の教員が大学で大学院レベルの講義を受講、プロジェクト3はリレー講義プログラムといって、市教委から派遣される講師と大学教員とリレー式に講義を受け持つ形で構成されている。

喜多雄一は<sup>3)</sup> 岡山大学教育学部で学部と附属学校園が連携しながら、学部や大学院生に学校現場の実践的指導を積ませようとして相互乗り入れ授業を推進している。

黒瀬基郎、林 孝<sup>9)</sup> は休業日における附属の子どもの現状と課題を明かにし、更に附属学校園と地域連携について研究を進めている。

このように附属学校園は学部との連携<sup>1), 8)</sup> や地域社会との教育連携<sup>9), 8)</sup> を行い、また学部は学生や大学院生の実践力の向上に役立てようとして、この他にも、多くの試みがなされてきている。

そこで、これらの試みが附属学校園は附属学校園のメリットをどれだけ満たしたか、学部は学部のメリットをどれだけ満たしたかについての吟味は黒瀬<sup>9)</sup> が学外講師による授業、授業外活動について、生徒にアンケートを行い88.1%が役立ったと言う報告があるだけである。

今回は本学部の特別支援学校で行っている「ふようスポーツ」等に参加している学生が、卒業して現職にある者が教員養成にどのように感じているのかの実態を知るために本研究に着手した。

色々な形で教育の現場に学生の参加を求めてきたがその意識の実態はどうであるのか、果たしてその成果は上がっているのかは明かにされていない。そこで行っていることの意識の調査を行う事によって成果が有るのか無いのかの実態を知ろうとした。

II 研究の方法

鹿児島大学教育学部附属養護学校（現在名：鹿児島大学附属特別支援学校）において、附養スポ

ーツクラブ等に参加した学生、指導した学生、そして各種行事に参加協力した学生にアンケートの調査を行った。集計し、統計処理を行った。

参加者の行事の種類は運動会が13人、学習発表会が9人、遠足9人、wa’（ダンス同好会の名称）7人、附養まつり2人、附養スポーツ2人、後はその他各1人であった。

参加の回数は多い人から数えると45回の75時間が1人、次いで30回（時間不明）が1人、25回の36時間が1人、週一回の2年が1人、週一回の1年半が1人、週一回（期間不明）が1人、4～5回3人、3回が3人、2回が4人、1回が7人、無回答が6人であった。

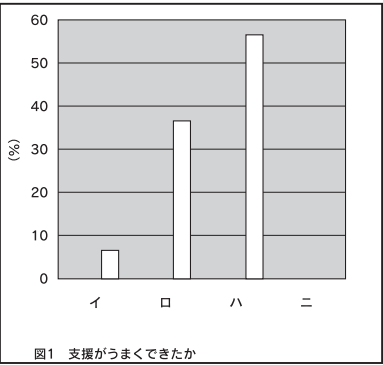
参加回数の多い人と少ない人の回答の項目の $\chi^2$ 検定を行った。また、参加イベントの単一と複数に意識の違いが見られるかについて、身体活動を主とする運動会と創作や自己表現を主とする学習発表会に参加意識の違いはないかについて $\chi^2$ 検定を行った。

III 結果と考察

1 支援がうまくできたか、できなかったについて

表1. 支援がうまくできたか

	項目	回答数	%
イ	うまくできた	2部b	6.7
ロ	できた	11人	37
ハ	難しかった	17人	57
ニ	全然うまくできない	0人	0

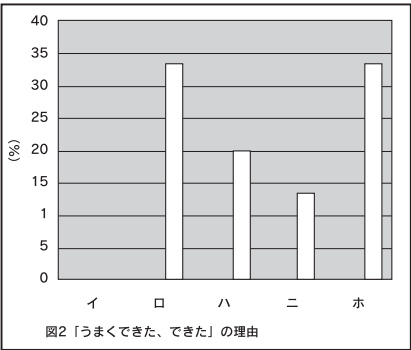


1) ・「図1」は支援がうまくできたか否かの回答を一覧表に纏めた者である。イ「うまくできた」の回答が2人、ロ「できた」の回答が11人、ハ「難しかった」が17人、ニ「全然うまくいかなかった」の回答は0人であった。「難しい」と感じた人、感じている人が56.7%、「うまくできた」と「できた」の人が13人で合わせても43.4%であった。この結果、支援が難しいと感じた人がやや多かった。

2 支援がうまく出来た人の内容について

表2 「うまくできた」、「できた」理由の回答

	項目	回答数	%
イ	自分の得意の分野のため	0人	0
ロ	顧問教師の手助けがあったため	5人	33.4
ハ	子供達がやる気があったため	3人	20
ニ	子どもと関わりをもてたため	2人	13.4
ホ	障害のある子どもとの経験があったため	5人	33.4

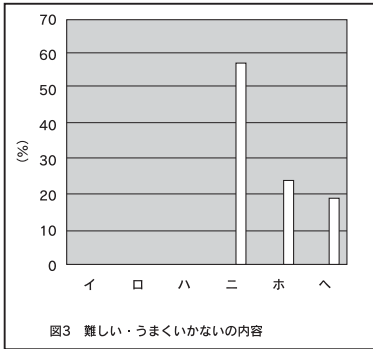


「表2」・「図2」は「うまく出来た」、「できた」理由をまとめたものである。ロとホの回答が多く、顧問教師の手助けや障害のある子どもとの経験が大きな理由になっている。障害のある子どもの指導は経験のある人の指導や手助けが必要であることが考えられた。

3 支援の難しかったひとの難しい回答について

表3 「難しい」・「全然うまくいかない」回答の内容

	項目	回答数	%
イ	不得意な分野だったため	0人	0
ロ	顧問教師の手助けなかった	0人	0
ハ	子どもが興味を示さない	0人	0
ニ	子どもと関われなかった	12人	57.2
ホ	障害のある子どもと交流・指導の経験が無かった	5人	23.8
ヘ	その他	4人	19.1

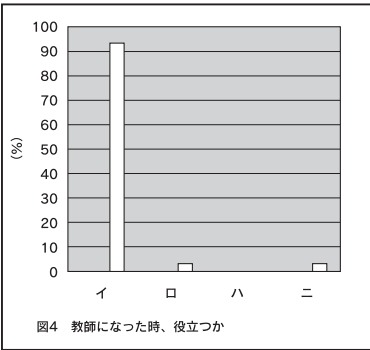


「表3」・「図3」にみるように「子どもと関われなかった」、「障害のある子どもの指導経験が無かった」等で「うまくできなかった」ことの裏返しの回答になった。うまくいくためには経験や経験のある人の手助けが必要ということが大きな要因になっていることがわかった。心身に障害のある子供達の指導は経験のない人は全員が難しいと回答した。指導ができない人は障害のある子供達の指導は経験の有無しが大きく影響しているのではと考えるが、できた人は顧問教師等の手助けがあったからと回答しているのをみると、単に経験だけでも上手くいかない事が推察されることから、上手く指導するためには経験と指導豊富な人の手助けが必要だと考えられる。

4 この経験が将来教師になる時、役立つかについて

表4 この経験は教師になった時役立つ、役立ったと思いますか

	項目	回答数	%
イ	思う	28人	93.4
ロ	わからない	1人	3.33
ハ	思わない	0人	0
ニ	無回答	1人	3.33

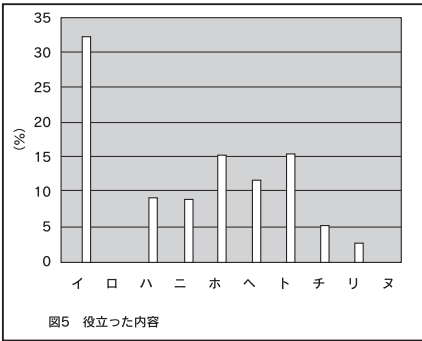


「表4」・「図4」は将来役立つかということの回答数である。黒瀬<sup>9</sup>等の報告では子どもの方が88.1%役立ったと答えているが、この調査では指導を行ったほうの回答であるが、93.8%のものが将来この経験が役立つと回答した。障害のある子どもを理解することが教育者には必要と感じているようである。このような企画は指導を受ける生徒の方の満足も大きく、指導をする者も将来役立つと感じている事がわかった。

5 教師になった時に役立つ内容について

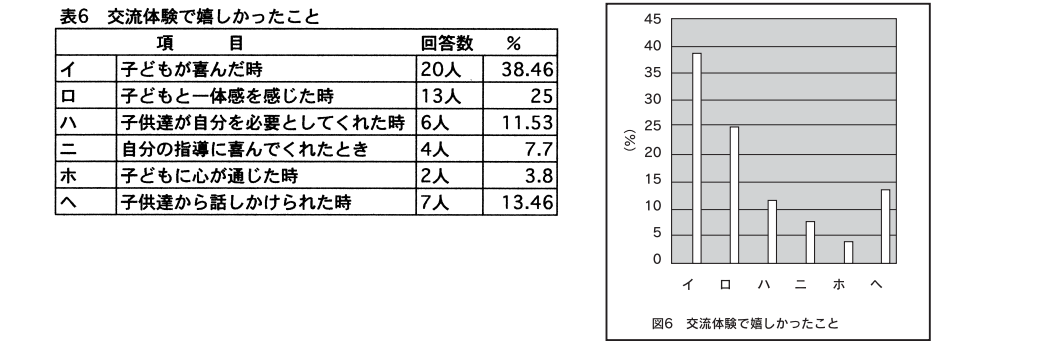
表5 役立った内容

	項目	回答数	%
イ	子どもと触れあったこと	25人	32.05
ロ	自分の専門を子どもに指導したこと	0人	0
ハ	子どもの心情を理解したこと	7人	8.97
ニ	特別支援教育が理解できたこと	7人	8.97
ホ	教師も職務が理解出来たこと	12人	15.38
ヘ	教師への情熱が高まったこと	9人	11.6
ト	指導の中で課題が見つかったこと	12人	15.4
チ	実践力が身についたこと	4人	5.12
リ	教師としての自覚ができたこと	2人	2.6
ヌ	指導に自信がもてるようになった	0人	0



「表5」・「図5」は役立つ内容を複数回答で求めたものである。最も多い回答が子どもと触れあったことをあげて、障害ある子どもと触れあったそのことに意味があると感じていると考えられる。次いで指導の中で課題が見つかったことをあげ、仏教大学<sup>9</sup>のGPにみるように教員養成にも役立っていることが伺える。同数に教師の職務が理解できたことをあげ、次いで教師への情熱が高まったことを挙げているのを考えると、このような企画に学生の参加は教員養成に大きな意味をもっていることが実証された。

6 体験交流で嬉しかったことについて



「表6」・「図6」に見るように最も多いのが「子どもが喜んだ時」、次いで「子どもと一体感を感じた時」、その次が「子どもから話し掛けられた時」で教師の資質の高い人が参加していることが推察される。子どもの何か反応があった時に嬉しさを感じているのが推察される。

7 子どもと触れあうことが出来たかについて

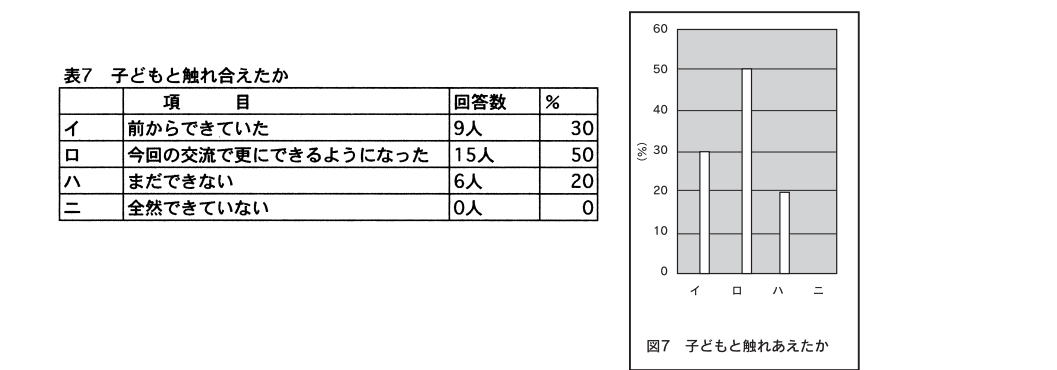
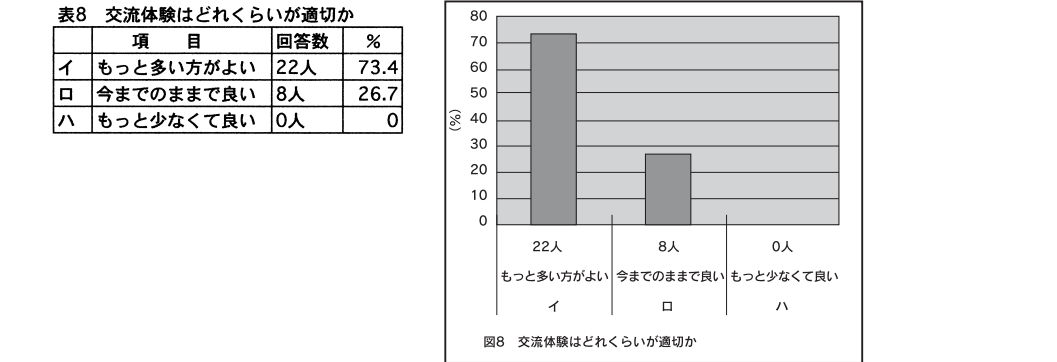


表7」・「図7」は「子どもと触れあえるようになりましたか」の問いに「今回の交流で更にできるようになった」が最も多く50%で、半数を絞めた。次いで前から出来ていたが30%で、まだできていないが20%であった。

8 これからの交流体験の必要について



「表8」・「図8」はこれからの交流体験の適切な必要性について問うたものであるが、「もっと多い方が良い」と答えたものが73、4%で、回数の少ない程もっと経験を積みたいと望んでいる者が多く、「今までのままで良いと」答えた者は相当に経験を積んだ者に多く見られた。

9 参加回数と指導が「うまくできた」、「できた」、「むずかしい」の関係について

「表9」参加回数と「できた」「できない」

参加の回数	うまくできた	できた	難しい
2回まで	1	4	11
3回以上	1	3	11

「表9」は参加数が2回までの人と3回以上の人に分け、経験の差が障害のある子どもへの指導に関係があるかということで $\chi^2$ 検定を行った。

$(2, 0.05) = 5.991$ 、 $\chi^2 > 5.991$ であるから $\chi^2$ 値は0.186であるので仮説は棄却されず、有意差はみられなかった。これまで、参加回数の多さは指導がうまくできるか否か大きく関与しているのではと考えていたが関与するところまでは影響していない事がわかった。

「指導ができた」の回答理由の中の「顧問教師の手助けがあったから」と答えていたが、うまく指導するにはむしろ参加回数よりは経験豊富な人の手助けの方の影響が大きいのではないかと考えられた。

10 単一と複数イベントへの参加に意識の違いについて

表10 参加イベント・行事の単一・複数と役立った事の比較

項目	単一	複数
子供達と触れ合えた事	12	13
子供達の心情が理解出来た事	5	2
特別支援教育が理解出来た事	3	3
教師としての職務の理解が出来た事	7	5
教師への情熱が高まった事	3	5
指導の中で多くの理解が見つかった事	6	7
実践力が身についたこと	3	2
教師としての自覚が出来た事	1	1

「表10」は単一と複数イベントに参加した回答である。両者に意識の違いが見られるかについて、 $\chi^2$ 検定をおこなった。

$(7, 0.05) = 14.067$   $\chi^2 > 14.067$ である。検定した $\chi^2$ 値は2.64が得られた。よって仮説は棄却されず、両者に有意差は見られなかった。このことから、イベント参加は単一か複数ということは関係しないことがわかった。

11 イベント種目の違いについて

表11 異なるイベント・行事に参加して役立った事の比較

項目	運動会	学習発表会
子供達と触れ合えた事	12	10
子供達の心情が理解出来た事	3	1
特別支援教育が理解出来た事	5	1
教師としての職務の理解が出来た事	6	3
教師への情熱が高まった事	1	5
指導の中で多くの理解が見つかった事	5	8
実践力が身についたこと	1	4
教師としての自覚が出来た事	1	1

「表11」は運動会と学習発表会の回答を纏めた者である。身体活動を主とする運動会と創作や自己表現を主とする学習発表会との間に意識の違いがみられるかについて、 $\chi^2$ 検定を行った。 $(7, 0.05) = 14.067$   $\chi^2 > 14.067$ である。検定した $\chi^2$ 値は6.633が得られた。よって仮説は棄却されず、運動会と学習発表会の間には有意差は見られなかった。このことから、身体活動か創作自己表現の内容の違いは関係ない事がわかった。

Ⅳ 総括

附属養護学校が行っている「附養スポーツクラブ」や「WA」のクラブ活動や「遠足」、「学習発表会」、「附養まつり」等の学校行事に学生の支援を求めることの学部と附属の連携に教員養成と言う立場から、どのような意義やあるのかを実証するためにアンケートによる回答を求めた結果、以下のようなことが明かになった。

- 1 イベント種目間に意識の有意差は見られなかった。
- 2 参加回数の多い人と少ない人の間には有意差は見られなかった。
- 2 単一種目と複数種目への参加者の意識に違いが見られなかった。
- 4 指導をするには顧問教員等の手助けがあった方がうまく行く事がわかった。
- 5 このイベントには教員を目指す質の高い学生が参加している事が推測された。
- 6 指導者は指導の中で子どもに何か反応があった時にうれしさや喜びを感じている事がわかった。
- 7 このようなイベントの経験の少ない者程、このような機会を望む者が多かった。
- 8 このようなイベント経験は93%の者が将来役立つと回答があり、このイベントは一定の教員養成の資質向上に役立っているといえる。

以上の事から、障害のある子どもの指導を上手くするためには経験と経験豊富な人の手助け必要であると考える。

引用・参考文献

- 1) 藤本 登 平尾健二 森岡 亮 山内あさみ他 附属学校との連携による総合的な学習への対応への可能性－学生と附属学校教員へのアンケート調査－ 福岡教育大学紀要 56号 教職編
- 2) 梶谷徹一 教職大学院の創設の教員の力量向上 現代の高等教育 N493 8-9月号 2007
- 3) 喜多雅一 大学・学部と附属学校園相互乗り入れ授業の推進－岡山大学教育学部－ 日本教育大学協会 会報93号
- 4) 木岡一明編著，教育開発研究所，2003 西日本新聞 体験実習5倍の1000時間に 平成15年3月2日
- 5) 黒瀬基郎，林 孝他10名 附属学校園と地域社会の教育連携に関する研究 学部附属学校共同研究紀要 広島大学学部・附属学校共同研究機構発行 第31号 p7－14
- 6) 黒瀬基郎，林 孝他10名，附属学校園と地域社会の教育連携に関する研究－休業日における附属の子どもたちの現状と課題－ 学部附属学校共同研究紀要 広島大学学部・附属学校共同研究機構発行 第32号，2003
- 7) 神戸新聞 高校科目に教育入門 教壇への道 朝刊 2007年3月25日

- 8) 大谷実子 大学・学部と附属学校園との連携の推進－金沢大学－ 日本教育大学協会 会報93号
- 9) 産経新聞 現場で学べ 実践力を備えた小学校教員養成 小大連携プロジェクト展開 朝刊 2007年1月27日